

学校における教育相談の在り方

- 日常のかかわりに生かすカウンセリングの技法 -

カウンセラー研修員 佐藤 剛（川崎市立南加瀬中学校）

主題設定の理由

今日的な課題である「いじめ」や「不登校」「学級崩壊」「新しい荒れ」などは学校でも定義が難しい問題でありながら、曖昧さを残しながら社会の中で広く使われている。

「新しい荒れ」と呼ばれるものの実態とはどんなものであろうか。数量化されたデータから判断すると、器物破損、対教師暴力、生徒間暴力の発生状況は¹⁾平成7年度から急上昇の傾向にある。一方粗暴犯の少年検挙人員の推移は多少の波はあるが、減少傾向にある。つまり、学校では授業や活動に支障をきたすような状況が増加していると考えられる。こうした状況に見える特徴として、「指導の困難な生徒」よりも、同調して無責任な行動をとる生徒の多さにある。中心的な存在と思われる生徒に声をかけると、「なんで俺だけに言うの」と返される。行動はともにしているが、グループの関係は希薄である。

また、「不登校生徒」については、横這いから増加の傾向にある。

近年明らかに集団に適應することが苦手な生徒が増えている。組織だって行動することも見られなくなった。学校で起きる問題の多くは人間関係の結びつきの希薄さが基盤になっているように思える。生徒同士で人間関係を結びにくくなっている現状の中、今後、最優先の課題は生徒と教師の関係づくりであろう。教育活動の基盤は人と人との関係性にある。尊重しなければならないのは、目の前にいる生徒とのかかわりである。生徒と直接触れ合う時間や手間を節約しては、いくら仕事の効率がよくとも本末転倒である。我々がねらいとする教育の成果は、より良い関係性を築くコミュニケーションとひと続きにあるものだと考える。

この1年間、学校での活動を軸にしながら、教育相談センターで幅広い研修を行った。そのため学校を外部からとらえる視点も得られた。障害児教育を含む教育相談の専門のスタッフや、ベテランの電話相談員の方々と接することにより、教師として学ぶべきことがたくさんあった。またグループアプローチにも参加して教師とはまったく違った立場で、子どもとかかわる経験をした。プレイセラピーのケースも担当した。日常のかかわりで生かせるカウンセリング技法も学んだ。対人関係にかかわる教師のありようを考えさせられた。これらの研修や経験を通して、生徒との「関係性」に着目し、学校なりの教育相談のあり方を考え、教師が生徒とかかわる上で配慮すべきことをまとめることにした。

研究の内容

1. 指向性のある集団としての教師の立場の重要性

学校は、指導要領にあるように、生徒の「人間としての調和のとれた育成」を目指し、「生きる力をはぐくむ」ことをねらいとして教育活動を行う枠組みをもった組織体である。

各教科はもとより総合的な学習や選択の授業を担当していく教師集団は、今までの指導法に甘んじることなく、教師自身が生徒に先んじて変容していくことが求められている。教科間であまり干渉しあわない、いわゆる「タコツボ」型のものから指導要領を基本理念に、横断的、総合的に理解、連携しあう

¹⁾小林 正幸 「学級再生」講談社 2000年

組織を生かした指導体制が望まれている。指導計画も単に一教科としての観点からだけでなく、学校の教育活動全体との関連を十分に考慮して、作成されることが必要とされている。特に道徳については、「心のノート・中学校」の活用が求められており、そこには心理学及び哲学的なアプローチが取り入れられている。専門教科を拠点としながらも中学校の教育課程全体を見渡せる力が授業力を左右する時代になってきている。教師としての職業人としての技術、専門職としての実力を日々更新していくことがこれからの教師像として望まれている。生徒と保護者はその点を厳しく査定しているように思う。

2．学校としてすすめる教育相談について

指導要領における相談活動にかかわる記述としては、教育課程実施上の配慮事項で示されたガイダンス機能の充実があげられる。学校への適応や好ましい人間関係の形成等のために、各種の援助、相談活動などを学校としてすすめていくものであるとしている。また、生徒指導の充実の項では、担任の日頃の人間的な触れあいに基づくきめ細かい観察や面接に加え、学校の教職員による広い視野からの生徒理解を行う大切さが述べられている。

学校として推進する相談活動は、教育活動全体を通じて行われる指導の一環として行われる援助活動と解釈できる。教師の本分はまず授業によって「生きる力」をつけさせることにある。科学的な思考や論理的な表現力を鍛え、生活を科学したり、心身の健康に留意したりして、現在及び将来の生活を豊かなものにしようとするように援助をする。授業のほかにも日頃の様々な場面で関係づくりの場が想定できる。教育相談週間での個別の面談はもとより、日常の学校生活のあらゆる場面で、生徒を見守り、生徒の声を聴く機会がある。我々が部活動で得意とする、見守りを基本としたコーチングの発想を日常の生徒とのかかわりにも生かすことができる。まずは、枠にとらわれず、機会を逃さずコミュニケーションをとることが第一義であり、それを相談活動の一環と見なすことを共通理解したい。

3．日常のかかわりに生かすカウンセリングの技法

センターでの研修で多くのことを経験し、学ぶことができた。生徒とのかかわりに還元できそうな事柄の主なものを考察する。

(1) 遊戯療法における制限の運用

プレイセラピーを経験した。印象としては、ただ無心に遊べばいいのだと思っていたが、いくつかの基本原則があった。それは極めて簡素なものだが、原理と言うにふさわしいものであった。まず、こちらの構えとしては、まじめに、一貫して、賢明に対応し、ここぞというときには、100パーセントの力で向き合うことである。

現実のかかわりの中で自分の責任に気づかせるのに必要なだけの制限を設けること。非指示だけが万能薬ではないことに勇気づけられた。制限の意義は重要であり、学校における教師の取るべき態度として参考になった。相手が、壊す、傷つける、危害を加えることは制限する。安全を確保するのに必要な常識的な制限を毅然と設ける。

時間の枠組みも例外ではない。情に流されず、一度約束した制限は必ず、一貫して守らせる。現実に関根をおろした常識的な制限を設け、そのことに律儀にかかわり、一貫性を保つことは、子どもにとって安心感をもたらすことになる。制限を圧力と混同しないように注意をしなければならない。制限の運用は、セラピストの機転、一貫性、正直さ、強さなどを呼び起こす原理として働く。制限が一貫しないであいまいな態度で与えられ、ごちなくあつかうと、一つの挑戦となってしまうことさえあるという。

この状況は、学校において切実な問題となっている。枠の制限に関してはいろんな機関の中で、学校

が一番弱くなっているように思われる。自分の行動に責任がついてまわることを体験させることが学校だけでは難しくなっている。

(2) 生徒の信頼を得、関係性を促進するアカウントビリティ

²⁾「ファッションにぜんぜん気がいかない人はかっこよくないが、ファッション、ファッションとそれしか頭がない人はもっとかっこわるい。このふたつ、一見反対のこのようで、じつは同じ態度を意味している。他人がそこにいないのだ。あるいは、他人に自分がどのように映っているかという想像力が欠けているのだ。」という鷲田の考えが生徒の実態を言い当てていた。そこで、鷲田の授業を朝会で実際に演じてみた。生徒指導部のK教諭が服装のTPOについて話をしたあと、筆者が壇上に昇り、「K先生と実験をします。」ということで、ミネラルウォーターをバケツ、花瓶、し瓶、コップにそれぞれ注ぎ、「さあ、好きな容器で飲んでください。」と投げかけた。バケツから順に勧め、そのつどK教諭は理由を言いながら断る。特にし瓶については「いかがですか、生暖かくておいしそうですよ。」と勧めると、生徒たちは、自分のことのように、「えーっ」と声をあげていた。結局コップの水をおいしそうに飲んだところで、いかに、見た目の印象が大切かを実感してもらった。

こちらがどのような考えのもとに話をしているのかを丁寧に説明することは、相手を尊重することになる。

集団生活のきまりについては、エチケットとして、生徒主体に学級活動や生徒会などで検討を加える機会をつくっていく。新聞や、掲示物、放送などを手段に、生徒の活動の中で生徒自らが、互いに意見を交わし合い、つくりあげていくことに価値がある。教師はその過程を見守り、ともに考え行動していくスタンスをとることがよりよい関係性を維持することになる。どうしても最初は教師や学校に対する不満や意見が噴出するものだが、これは問題を顕在化するのに役立ち、そこからやっと落ち着いて本質的な解決策が考え始められる。

(3) 生徒の気持ちがわかるロールプレイング

研修の中で一番の苦痛はロールプレイングだった。ウォーミングアップでいくつかの交流ゲームのようなものをした。この段階でかなり心的疲労を覚えた。接触ゲームなどは本当に恥ずかしく冷や汗が出るほどだった。いよいよ、教師役と生徒役に分かれて、困った生徒への対応場面を行った。授業妨害や徘徊生徒の役割をしてみて、壁になってくれる教師のありがたさが身にしみた。もし、かかわってもらえなかったら、糸の切れた凧のように彷徨うしかない。あるいは暴走しつづけるしかないことが実感できた。また、一般の生徒の役割をした先生からは、授業を担当している先生がなんとかしてくれるという期待をもっていることが実感できたと伺った。役割を交代してみると、その都度迷いが生じながらもその場に精一杯自分を出し切っていくことで、事態が変化をしていくことが意識化できた。今一度と言われると二の足を踏むが、生徒の気持ちや行動を身をもって理解できたような気がする。また、教師の関わり方いかんで生徒の気持ちがどのように変化していくかも体感できた。その後の生徒との関わりでゆとりができた。今までと同じような緊張場面に遭遇しても、心なしか生徒の方も安心感をもって接してくるようになった。ロールプレイングは生徒と教師の関係性を理解するために、是非やってみるものであると思った。

(4) 教師自身のアンガー・コントロールと論理療法

生徒は教師のノンバーバルなコミュニケーションに敏感である。教師の顔つき、立ち振る舞い、語調等に表れる感情は言葉以上に伝わってしまう。

センターで小学校低学年の子どもをケースとして担当して、侮れない言葉があった。「 は挑発し

²⁾鷲田 精一 「てつがくを着て、まちを歩こう」同朋社 2000年

たらずく怒るよ，ちょろいよ。」教師を含めた，簡単に腹を立ててしまう大人に対する言葉だと思う。この日，お菓子の袋を片手に，私の顔を見るなり，「これ食べていいですか。今日は給食を食べてこなかったんだよ。」と袋に入ったお菓子を見せた。ここまで我慢をしてきた気持ちを察することができた。この子がわかって欲しいのは，大人の怒りに触れ，幼いながら憤慨をした気持ちであり感情であることがつかめた。

教師側の「怒り」のコントロールは生徒との「関係性」を維持する上で重要である。対策として，石隈の「子どもとも自分ともやわらかにつきあえる論理療法」の考えが有効であることを研修した。論理療法においてビリーフは，価値観のひとつの表れである。教師は「自分は立派な教育活動を行うべきである。自分の教育活動は自分の思い通りになるべきである。そして，子どもは自分の思い通りになるべきである」というイラショナル・ビリーフ（不合理な考え方，不適切な感情）をもちやすい。しかし実際には，子どもは思った通りにはならないので，子どもへの怒りと自分への怒りが生じる。こういふときはには自分は変わりたいと思わずに，相手や状況のほうに変わって欲しいと思いがちである。「あいつはけしからん」と思うのは，相手の行為や言動が我々の内部世界から「けしからん」という感情を引き出し，怒りとして湧いてくるらしい。

「生徒指導はうまくいかなければいけない」「子どもになめられてはいけない」「他の先生から指導力がないと指摘されたくない」等の意識下で「自分の弱みとして嫌悪の情をいただいている部分」に感情と結びついているなんらかの刺激を受けてスイッチが入ると，押さえきれない感情が浮上してきてしまう。このようなしかけを自覚し，自分の怒りの状況（キレる程度）をモニターすることが必要である。

教師が持ちやすいイラショナル・ビリーフは「堅い考え」ともいえる。ステレオタイプの思考や，過度の一般化をしてしまっていることが多い。出来事にかかわったとき，その体験をどうとらえるか，考え方や認知が，感情や行動の鍵を握る要因となる。多様な考え方，たくさんの選択肢があることに気づき，ラショナル・ビリーフ（柔らかい考え方で，現実的で，論理的で，幸福に役に立つ）をもつようにすることが大事である。そして，なにより子どもであって一人の人間として人格をもっており，子どもなりの人生を送っていること。ひたむきに生きている人として尊重をして，子どもの考えや気持ちを想像することを怠らないことがアンガーコントロールの基本にある。

（５）傾聴的態度と非言語コミュニケーション

傾聴的態度は，コミュニケーションを促進するうえで，大きな働きをしている。研修において体験をした。姿勢や視線顔つきは全て相手へのメッセージとなっている。こちらを見て頷きながらしっかり聴いてますよと共感的に聴いてもらうと，満足感をもつことができる。一生懸命に聞いてもらえた心地よさは忘れることができない。２人１組で交互に役割を分担して行ったが，これほどまでに気分が変わるものかと驚いた。生徒に話しかけられたら，目線を合わせ，最後までしっかり聴こうと思うようになった。

４．生徒とのかかわりが想定される主な相談場面と対応の実際

（１）授業中の援助にあたる学習相談

ＴＴや少人数の授業ではこの機会が一層多くなる。ＴＴで気づかされるのは，教師の授業の進め方が急ぎ過ぎの傾向にあることである。生徒と同じ立場で教師の説明や指示を聞いてみると，具体的に何をしたらよいかわからぬままに，質問をする間もなく，進んでしまうことがままある。机間指導をしている教師がモニター役となり，生徒と共感的にブレーキをかけ，自分たちの課題や為すべき事を明らかにすることで満足のいく学習が成立していく経験をした。

授業者自らが何かをおもしろがったり，向上していこうという気持ちを忘れずに，生徒とかかわり，準備をすることが，いい関係を築いていくポイントとなる。

（２）休息时间等の日常の活動の中で

日頃，クラス内でまじめに過ごしている生徒は，一部の声の大きいわがままな生徒や，それに適切に対応しない教師に不満や反発を持ちながらも耐え忍んでいる場合がある。休息時間に教師が教室や廊下にいることで，居場所をなくした生徒の存在を見つけだすことができる。作業を頼んだり，談話をしたりして声かけができる。

いじめによる不登校のきっかけは，教職員の目の届かない場面で発生していることが多い。ゴミの回収や掃除をしながらでも，校内を人工衛星のように漂い，一般生徒に安心感を与え，気になる生徒には声をかけていくことができる。「先生いつも掃除してるね。汚されて，頭にこない？」と話してきた生徒は掃除を手伝うようになった。

（３）徘徊など問題傾向を表している生徒に対して

問題傾向を表す生徒は，ぶつかる相手を捜している。「どうした，教室に戻るよ」と壁になることで，暴走せずに，気を静め，収まりがつく場合が多い。生育歴，家庭環境等の抱えている背景を理解しておく。小さな変化を見逃さず，傍観せず，説諭する。目標を小刻みにして，本人の意思を尊重しながらその都度次回までに正すことを約束する。一方的な指導ではなく，生徒の言い分を聴く姿勢を保つ。気長に話を聴いていたら，「先生は暇だね」と嬉しそうに笑顔を作る生徒がいる。服装等の見かけに反応せず，いろんな教師がじっくり話を聴いたり，話したりすることで，「荒れそうで荒れない学校」を維持することになる。

（４）出来事が起きた場合

前もって，法に触れること，他人に危害を加えることについては，絶対に許されることではなく，外部機関の協力を得ることをガイダンスしておく。

出来事が起こってもあわてず，平常心を保つ。ゆっくりとした動作で向かい，まず，その場の安全を確保する。当事者の移動が必要な場合は速やかに，穏やかに，力強く行う。一方的な指導ではなく，個別に生徒の言い分を聴く姿勢を保つ。教職員で手分けをし，周りにいた生徒からも情報を得る。教職員同士で情報を持ち寄り今後を検討する。当事者とかかわりを持ちながら，ともに問題に向き合う姿勢を保つ。

（５）定期個別相談週間

担任による個別相談を行う。前もって生活アンケートをとる。全校単位で行うことにより，取りかかりやすくなる。短めの時間設定で，クラス全員と平等に話す。障害児級の通級生徒とも話をする。学級の雰囲気や流れにのまれ，何も言えないでいる生徒達が秘めている問題意識は，本質をついているものが多い。近年「授業中に邪魔をする生徒に厳しくしてほしい」「無駄に怒らないでほしい」という声が増えている。担任が真摯に受けとめ，学年や学校で動きをつくることで，信頼感が増す。

（６）カウンセラーによる相談

原則は保護者や本人の電話予約による相談であるが，休息時間に訪れる生徒も受け入れている。相談室だよりで広報し，資料も掲載する。訪問生徒に対し，アートセラピーを利用している。女子は折り紙やコラージュ，男子は粘土細工が好みである。保健室と行ったり来たりする生徒もあり，その子をめぐってカウンセラーと教職員の連携が自然にできている。

（７）部活動でのコーチング

活動を見守り，張りを持たせる。技能を高めるための話し合いを通して，なすべき行動を明確化する。

聴くことにより、生徒のアイデアを明確にし、行動へとつなげる。

(8) 不登校生徒宅への家庭訪問

学校の様子を定期的に知らせ、押しつけがましくなく、適度の登校刺激を与え続ける。一方的な関わりでも、教師の中に存在していることを形で示し続ける。

今後の課題

多くの場合、不登校や行動上の問題は量的にも質的にも、学習に関わって生じている。1日の3分の1を学校で過ごす生徒に対して、学校と教師はその場に居合わせ、かかわる中で、何らかの責任を負うことになる。教師はよい授業を通してよい関係を築いていくことが使命であろう。指導の援助の機能として、学校における教育相談活動を定着させ、充実させていき、生徒と教師の関係をよりよいものにしていきたいと思っている。

今後生徒や保護者との効果的なかわりについて、カウンセラーとも相互にコンサルテーションをし、校内及び校外にも広がる援助チームによる体制の構築をしていきたい。繋ぎ役として、足を使い、心を通わせ、互いにできることを明確にし、強く温かいチームワークを築きあげていきたい。

教師にとって「指導の困難な生徒」と認知されていた生徒の中には、発達障害のある生徒もいるのではないかという疑問を持てるようになった。その見極めは早ければ早いほどよい訳で、専門家との連携や我々の勉強の機会も設け、意識改革をして行きたい。

最後になりましたが、この研修の機会を与えていただいたことに感謝すると共に、ご指導ご助言をいただきました教育相談センターの皆様、南加瀬中学校の校長先生をはじめ諸先生方に心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

文部省 中学校指導要領 解説 - 総則編 -	1999年
石隈 利紀 『学校心理学』 誠信書房	1999年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター研修指導主事	伊藤 一晴
-------------------	-------